



巻頭特集 十分な音声指導が後の読み書きの基礎を培う！ ～英語の音(音素)認識が向上する指導法～

河合 裕美 (神田外語大学 児童英語教育研究センター 専任講師)

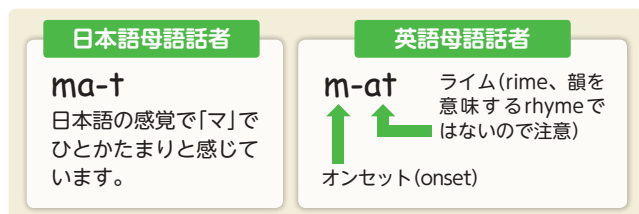
小学校外国語教育は大きく変わろうとしています。高学年では、従来の「聞く・話す」に、「読む・書く」の言語活動が加わったことが大きく異なる点です。どのように指導していけばよいのか、多くの先生が不安に思っていることでしょう。しかし、小学校英語の「読み書き」の活動は、中学・高校のリーディングやライティング指導と同じではありません。十分な音声指導をすることによって、児童は次第に英語の音(音素)や英語らしい韻律(リズムなど)の特徴を認識できるようになります。英語の音(音素)を認識できる能力(これを音素認識能力と呼びます)こそが読み書きの根幹の力を育てていくことになるのです。本稿では英語音声と日本語音声の特徴の一部を比較し、具体的にどのように指導していけばよいのか、中学年から高学年の接続を意識した指導のアイデアをご紹介します。紙面が限られているので、本稿では「分節音(音素)^(注)と呼ばれる個々の音の指導について取り上げます。

1. 英語の音(音素)の指導のために理解しておくこと

1つの単語の中には1つまたは複数の音節(シラブル)があり、音節はさらに「分節音」という最小単位の音に分解されます。例えば、matは1音節で、さらに /m/ /æ/ /t/ と3つの分節音から成り立っています。1音節には1つの母音が含まれるので、rabbit は /rab/ と /bit/ の2音節から構成されています。英語の母音は /i, ɪ, e, æ, ə, u, ʊ, ʌ, ɔ, ɑ/ の単音と、さらに二重母音や三重母音が存在します。日本語の母音は5つです。単音だけでも日本語母音より多くあるので、日本語にない英語分節音は、日本語音にある音に置き換えられて発音、表記されてしまいます。/æ, ə, ʌ, ɔ, ɑ/ のように音が似た母音は、日本語の「ア」と表記され、/e/ はカタカナで「エ」と表記されてしまうので、カタカナで表記されてしまうと、これらの微妙な音の違いに気付くことはできません。英語母語ALTに mat と met を発音してもらおうと、真ん中の母音が大変よく似ていることに気付きます。子どもたちには目を閉じてもらって「どっちが発音されているでしょう？」とクイズを出してみてください。ほとんどの児童は正解できません。しかし、明示的な音声指導を毎授業に取り入れて継続していくと、徐々に微妙な違いが分かるようになっていきます。

英単語やアルファベットにカタカナをふってしまうと、児童は無意識に日本語を介していることになるので、カタカナは使わず、ALTに何度も発音してもらいましょう。何度も聞いているうちに、a [æ]とe [e]の違いが分かるようになってきます。

英語音の最小音が音素(分節音)なのに対して、日本語音の最小単位は、基本的には子音に母音がくっついた形でモーラと呼ばれています。例えば、日本語の「マ」は、英語音で見れば /m/ と /a/ の2つの分節音できています。ここでまたクイズです。「matを2つに区切ってみてください。どこで分かれるでしょう?」小学校教員対象の研修でよくこのクイズを出すのですが、ほとんどの先生が下図の左側のように区切られるようです。日本人はモーラの単位で音を分けるので、maとtの間で分けてしまうのです。一方、英語母語話者は頭音のm(これをオンセットと呼びます)とat(これをライムと呼んでいます)の間で分けています。高学年児童にはこのonset-rimeの関係を明示的に指導し、毎授業短時間のアクティビティを続けることで、次第に区切り目が分かるようになっていきます。



2. 音素認識活動の授業例

中学年児童にはまず毎授業10分程度と時間を決め、「アルファベットジングル」をしてから、使用した単語の中で「頭音」を聞いてみましょう。このとき図1の例のように、p-b, t-d, k-gの子音(破裂音)から始めるとよいでしょう。

ALT (T2): bear. bear. T1: What is the beginning sound? 頭音は何かな? Ss: [b] (音の表記です。ビーではありません。) T2: Very good! Next. pineapple. pineapple. T1: What is the beginning sound? Ss: [p] T1&T2: Yes! Very good!

図1

アルファベットジングル

アルファベット a~z を【名前】⇒【音】⇒その音を持つ単語の順番でチャンツで “a /æ/ apple b /b/ bear, c /k/ cat.” と ALT に発音してもらって児童に真似をさせます。このとき、子音の発音の後に

母音が見つからないように注意してください。/b/ /p/などは、日本人が発音すると母音がつきやすく、「ブー」や「プー」と伸ばしがちです。発声時に音を破裂させると息しか聞こえないような発音なので聞き取りづらいですが、一旦静かにさせて ALT のモデル発音を聞く、そして発音してみるとという一連の流れを日常化するように心がけてください。

この活動は、下の音素認識能力の中の①で、単語の頭の音を認識できる能力を上げるものです。授業内のメインの活動においても、単元頻出単語を使ってこの活動を取り入れることができます。児童に新しい単語を発音させるときにも、頭の音を尋ねてみることもできます。ALTには、発音の際は「頭の音(beginning sound)」と、慣れてきたら「終わりの音(ending sound)」を児童に聞くように、前もって打ち合わせをしておきましょう。

音素認識能力(英語の個々の音を認識できる能力)

- 1 Phoneme isolation : 単語の個々の音素を認識できる。例えば、単語の頭の音(onset)や終わりの音(coda)の音素を認識できる能力。
- 2 Phoneme identity : 異なる単語群の中で共通の音素を認識できる。例. bike, boy, bellの共通する /b/ を認識できる。
- 3 Phoneme categorization : 単語群の中で異なる音素を特定できる能力。例. bus, bun, rugの中でrugだけ頭の音が異なることが分かる。
- 4 Blending ブレンディング: 単語の音素を分解して発音して何の単語かが分かる能力。例. /b//æ//t/ と個々に聞いてbatと分かる。
- 5 Segmentation セグメンテーション: ブレンディングとは逆で、batと聞いて3つの音素 /b//æ//t/ が分かる能力。
- 6 Phoneme deletion : ある単語から1つの音素を取り除くと別の単語であることが分かる能力。例. smileから頭音の /s/ を取るとmileになることが分かる。

(Ehri & Nunes, 2002, p. 111-112)

児童の語彙力がある程度つき、音に触れる活動にも慣れてきたら、図2のようなミニマルペアのアクティビティをやってみましょう。中学年では音に集中できるように、絵カードに単語の綴りが入っている必要はありません。同じ絵カードを使って高学年では、綴りを入れて文字も意識させるようにします。中学年では、cat-hatのようにライムが同じで頭音の音が異なり、児童が知っている3文字程度のレベルの絵カードを見せてALTに発音してもらいます(図2)。



図2 【中学年向け】ミニマルペアアクティビティ基本

PROFILE

河合 裕美 かわい ひろみ (神田外語大学児童英語教育研究センター 専任講師)

山口県出身。上智大学外国語学部英語学科卒業、獨協大学大学院外国語学研究科博士前期課程修了(英語教育学修士)、青山学院大学大学院文学研究科英米文学専攻博士後期課程修了(学術博士、初等英語教育)。専門は児童英語教育、応用言語学、音声教育。これまで東京都内や千葉県内公立小学校の外国語活動を担当しながら、公立小学校における効果的な指導法や日本人児童の英語音声習得を研究している。千葉県、福井県小学校外国語活動中核教員養成研修など各地で教員研修の講師を務める。

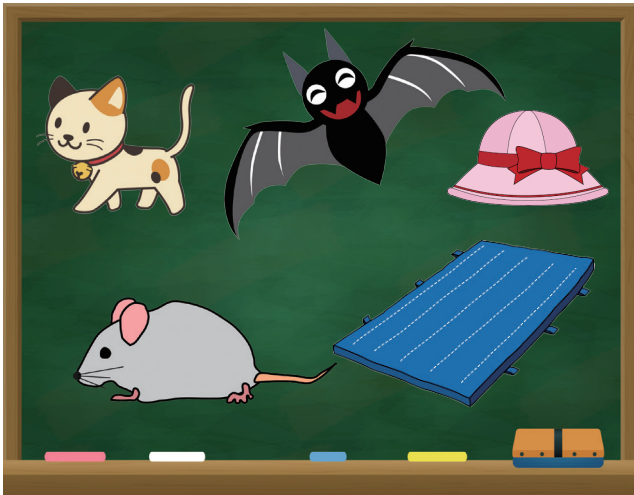


図3 【中学年向け】rimeが同じ単語カードを並べてみる
(左上から cat, bat, hat, rat, mat)

語彙数が増えてきたら図3のように、同じライムを持つ絵カードをいくつも並べて単語を発音して頭の音を探ねる、どの単語を発音しているのか尋ねる、頭の音だけALTに発音してもらって、児童には絵カードを指さして単語を発音させるような活動ができます。また、前ページにある音素認識能力の②や③の活動もできます。

高学年では、アルファベットの文字の【名前】(a, b, c)と【音】(/æ//b//k/)も定着し、中学年から続けてきた音に親しむ活動によって、音と文字が対応しているという認識能力が高まっています。これを、**音-文字一致認識能力と呼んでいます**。中学年では音にフォーカスしますが、図4のように、高学年では文字を常に出していきま。児童がライムを読めるかどうかALTに確認してもらおうと、高学年児童は多くのライムを読めるようになってきていることに驚かされます。-atの前に子音をつけてたくさん単語を作るように指示してみてください。私が実践指導した6年生のクラスでは、bat, cat, fat, hat, mat, pat, rat, satの3文字単語だけでなく、flat, chat, thatのような子音連続の単語

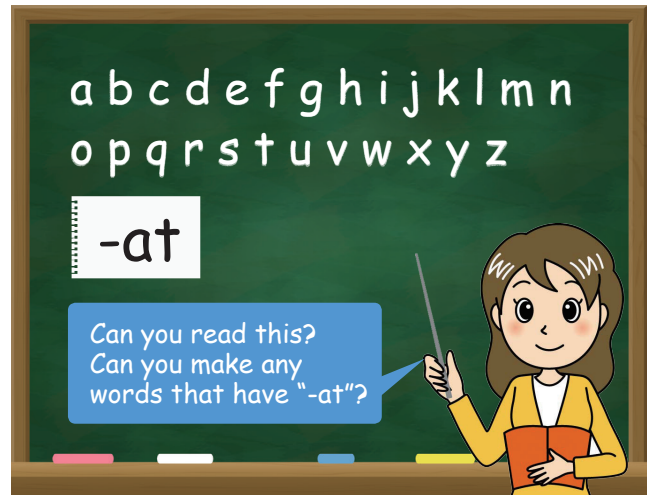


図4 【高学年向け】頭の音に対応する文字を入れるかどうか尋ねてみる

を発音してくれる児童もいました。

以上のように、児童が音声に触れる活動や、歌やチャンツなど英語の韻律的な特徴を活用した活動を組み合わせると、中学年のうちに音の聴き取りや発音能力が高まり、児童が高学年になったときに基礎的な「読み書き」能力を支える土台の力となるのです。アルファベット文字の書き方を指導する際には、文字の【名前】と【音】を声に出しながら書くように指導すると、音と文字の対応関係に対する意識(音-文字一致認識能力)がより一層向上するでしょう。

【引用・参考文献】

- ・文部科学省(2017).『学習指導要領』
- ・ Ehri, L. C., & Nune, S. R. (2002). The role of phonemic awareness in learning to read. In S. J. Samuels, & A. E. Farstrup (Eds.), What research has to say about reading instruction (3rd ed.), (pp. 110-139). Newark, DE: International Reading Association.
- ・ Yopp, H. K. (1992). Developing phonemic awareness in young children. The Reading Teacher, 45(9), 696-703.

注. 英語教育では「音素(phoneme)」は、「子どもが習得すべき言語の最小単位の一音」(Yopp, 1992)と定義づけられています。本稿では「音素認識」を扱うことから、便宜上「音素」と表記しますが、音声学・音韻論の分野では、「分節音」と呼んでいます。

授業の「コスパ」をどう高めるか

中村 博 (坂戸市立浅羽野小学校 主幹教諭)

1. はじめに

今年度は新学習指導要領の実施に向けての移行期開始となります。3・4年での外国語活動の新設、5・6年の「外国語」としての教科化、「読む」「書く」の学習の追加など、大幅に変化していくこととなります。また、授業時数の増加に伴って教材研究の時間も確保することが難しくなる状況とあってよいのではないのでしょうか。よく「外国語活動の授業では教材作成に時間がかかる」と言われています。ワークシートやアクティビティに必要な小道具などは、現場の先生方で自作されている場合も多く、数回の授業のために多くの時間を割かなければならないということもあるようです。ここでは、あまり時間をかけず、いってみれば「費用対効果の高い」授業づくりについてご紹介します。

2. 教室は教材の宝庫

普段子どもたちが生活している教室は教材の宝庫です。例えば「How many…?」の表現の場合、先生が自分の筆箱を見せて、「This is my pencil case. I have five pencils. How many pencils do you have?」と尋ねれば、子どもたちはすぐに自分の鉛筆の数を数え始めます。(「赤鉛筆は鉛筆として数えてもいいですか?」と真剣に質問してくる場合もあります。)はっきりと意味が分からなくても、聞かれている状況から何を今聞かれているのかということについて正しく理解できるため、日本語での説明も必要ありません。他にも色を表す英語の表現の場合、子どもの持ち物や身につけているものを使って、「Touch something yellow.」「Touch something pink.」のように色のついたものをタッチするゲームのような遊

びをすることができます。(この場合、最初は見つけにくい色を尋ねていくのがコツです。)教室にはいろいろな掲示物があるため、そこから色を見つけたり、先生でも気がつかないところにある色を見つけたりすることもあり、子どもたちの視野の広さに驚かされることもあります。色の表現のピクチャーカードを見せて繰り返し練習する方法もひとつとしてあるかと思いますが、普段身の回りにあるものを教材として使っていくと、子どもたちが英語を使うことの抵抗感を和らげることにもなります。

3. 先生方にも協力してもらいましょう

子どもたちは私たちが思っている以上に、先生に興味があるものです。そこで毎年「先生クイズ」を作成し、授業で使えるようにストックしておきます。方法としては年度当初に先生方をお願いしているいろいろな質問に答えてもらい、それを授業で使うというものです。質問の内容は以下のようなものです。

例えば、「can」を使った表現を扱う場合には「5 得意なこと」の回答を必ず使い、スリーヒントクイズを作ります。その一例は以下のようなものです。

- 1 出身地
- 2 誕生日
- 3 今すんでいるところ
- 4 好きなこと
- 5 得意なこと
(料理やスポーツなど)

PROFILE

中村 博 なかむら ひろし (坂戸市立浅羽野小学校 主幹教諭)

平成30年度より坂戸市立浅羽野小学校 主幹教諭。平成26年度埼玉県長期研修教員として小学校外国語活動の指導法について学ぶ。研修題目は「コミュニケーション能力の素地を養う指導方法の工夫・改善」

(ある先生の場合)

Who am I?

I am from Gunma. (出身地)

I like fishing. (好きなこと)

I can cook 餃子. (できること)

Who am I?

このように、いろいろな先生方の情報(あまり個人情報に深く入り込まない程度)をクイズにすると、思いのほか盛り上がります。先生方も小学生に分かるように工夫して回答してくれるので、英語の表現も簡単です。そのため子どもたちは日本語で説明しなくても十分に意味が分かります。また、このクイズのよいところは「当たったらうれしいけど、当たらなくても構わない」ということです。つまり教師の意図はlikeやcanの表現を繰り返して丁寧に聞かせることにあるため、もし外れたとしても「〇〇先生は釣りが好きなんだ。」ということは十分理解することができます。どっちに転んでもOKという、とてもお得な題材といってよいでしょう。(以前「I don't like carrots.」と書いたある先生が給食終了後、「〇〇先生ってニンジン嫌いなんでしょ?」といろいろな児童に質問されて困っていました。)また、せっかく集めたネタなので1時間だけで終わらずに、その単元に応じたところで小出しに使っていくと、さらにお得といえるでしょう。

4. 終わりに

いくつか実践例を紹介してきましたが、先生方のなかでもいろいろなアクティビティを思いついた方が多いのではないのでしょうか。「自分のクラスだったらどうだろうか」と考えることができるのは児童理解に長けている先生の強みです。そしてそのアクティビティを使って子どもたちと十分に英語でのやりとりをしていくことが可能になるはずで、つまり、「子どもたちがもっているものをどれだけ引き出すことができるか」ということが鍵を握ります。関心があることや知っていることを聞いたり話したりしているうちに、「もっと英語を使ってみよう」「こんなときは英語でどう言ったらいいのだろう」と子どもたちが考えられるような授業を充実させていくことが大切であると考えています。



家族が写っている写真を使って、いろいろな先生に自分の家族を紹介するアクティビティ

Who is this? This is my sister.

みんなで作る小学校英語プラットフォーム

～すべての先生が主体的に取り組むための教育委員会の関わり～

米澤 修一（千曲市教育委員会教育指導幹）

1. こんなことをしました

平成30・31年度の移行期から32年度の新学習指導要領全面实施を視野に、人口6万の千曲市も先頭走者ではありませんが独自に準備をしているところです。その大きな特徴はボトムアップを大切にしていることです。

専任の英語指導主事を置いていないわが千曲市では、千曲市教育委員会学校教育係の小池歩さん、西澤良子さん、そしてそのお父さん世代の元高校英語教員米澤の3人でチームのように動き、この大きな転換期に、次の7点を中心に小学校英語教育に関わっています。

- ① 千曲市校長会に急遽立ち上げていただいた「千曲市外国語活動・英語教育推進委員会」
- ② 先生方有志による「国際理解・英語研究会」
- ③ 千曲市ALT会議
- ④ ALT相互授業見学会
- ⑤ ALTによる各小学校での先生方対象の研修会
- ⑥ 地元の大学の学生による小学校訪問授業
- ⑦ 各種授業参観や外部研修会への参加



2. 誰が何をどのように

① 「千曲市外国語活動・英語教育推進委員会」

世話係の小学校の校長先生・委員長の教頭先生との連携で、計4回実施しました。うち3回は各学校の推進委員と担当予定の先生方を対象にした研修会で、1回目は小諸市英語教育推進員の先生に、2回目は県教委の指導主事に、3回目は大学の教授に講師をお願いしました。それぞれ50名ほどの先生方が出席しました。3・4年、5・6年の時間確保についても学びました。

② 先生方有志による「国際理解・英語研究会」

2回行われ、1回目は長野市内中学校の先生によるICT活用の授業、2回目は千曲市内小学校の先生によるICT活用と同じく千曲市内小学校の先生による単元の活動紹介が行われました。

③ 千曲市ALT会議

計8回行われ、事務手続きや日程確認等のほか、TESOL（英語教授法）の考え方や教科書を使ったTTの授業、授業案、HRT（学級担任）へのencouragementなどについて日本語と英語交じりで話し合いました。わが市には4人の独自採用ALTがいますが、4人ともきわめて高い日本語能力の持ち主です。日本語能力を雇用の条件にしているのは、小学校等における様々な面で深いコミュニケーションを求めていることと、日本語を外国語として習得する苦勞がわかっており、それが外国語として英語を学ぶ教室でも生きるはずという点を重視しているからです。われらが誇りの4人です。

④ ALT相互授業見学会

9回行いました。ALT4人による相互の授業見学と授業研究会です。市内9小学校で授業者(TT含む)を

PROFILE

米澤 修一 よねざわ しゅういち (千曲市教育委員会教育指導幹)

1952年生、千曲市出身。長野県の高校英語教員となり、後に県教委事務局教学指導課や高校教育課指導主事を経て管理係長、教育次長を歴任。長野県飯山北高校長退職後に医療系専門学校長。立科町教育委員長を務めた後千曲市の現職に。主な著書に『小中高連携で学力アップー奥信濃の教育創造』(学事出版)、『今こそ考えたい学力向上のためにできる新しいこと～学校の小さな変化がもたらす大きな可能性』(信州教育出版社)。趣味は農作業と短歌。



変えて行き、授業後は米澤らも参加して英語で授業研究会を行いました。

⑤ ALTによる各小学校での先生方対象の研修会

9回行いました。各小学校の先生方に何を研修したいかの希望調査を実施し、それをもとに4人のALTがどの内容を担当したいかを決めて行いました。先生方は合計117名が参加しました。ALTは毎回全員参加です。

⑥ 地元の大学の学生による小学校訪問授業

地元大学との連携で、「子どもと英語」講座の学外授業を千曲市内小学校と結び付けたもので、計2回実現できました。大学生5人(教育実習後の4年生含む)が小学5年生のクラスに来て、オリジナル教材を使って楽しく授業を組み立ててくれました。

⑦ 各種授業参観や外部研修会への参加

④のALT相互授業見学会とは別に、市内8授業、市外3授業(小諸市、上田市、坂城町)を参観したり、「小学校英語フォーラム」(啓林館主催)などに参加したものです。近隣の、小諸市の指導主事、上田市の指導主事、坂城町のコーディネーターにはお世話になりました。

3. これからのこと

平成30年度予算で、5・6年専任のALT2名の増員が実現しました。30年度は6人の独自採用ALTが活躍してくれます。また、県教委から英語専科の加配教員をいただくことが決まり、その配置校と新規ALTのベース校を合わせました。多様な可能性が生まれるよう支援したいと思います。ALTとのTTではHRTが教室の後ろや横にいることなく、初めは苦勞しても授業案を作成し主導的に進めることができるようにと、米澤がTTの授業案モデル(HRT・ALT・児童間でやりとりする英語をそれぞれ縦一列の欄に書ける様式)をデータ利用できるよう作成し、利用法を添えてインターネットにアップしました。

平成30年度は3・4年が15時間、5・6年が50時間を実施する形をとり(専科教員配置の小学校のみ30年度から35時間、70時間)、31年度にはそれぞれ35時間、70時間のフルサイズを実現し、32年度の全面实施に備える予定です。

千曲市の英語教育は先頭走者ではないかもしれませんが、先生方やALTの皆さんに千曲市で英語を教えたい、とっていただけるような「みんなで作る」雰囲気や主体性を大切に、関わる方々皆がそれぞれにやりがい・自身の成長・small changeによる創造性を感じることができるよう、教育委員会としても支援をしていきたいと思っています。



2018～2019年用 新学習指導要領対応

「Let's Try!」「We Can!」とあわせて利用できる!



「小学校英語 It's FUN! ペンマンシップ」

特徴

- 1 楽しみながら学ぶ!
英語の書き方の基礎をつくる!
- 2 知育問題で英語脳を鍛える!!
英検®に出る単語がわかる!

定価 各270円(税込)

仕様 3・4年生 B5版 48ページ
5・6年生 B5版 40ページ
(別冊解答 8ページ)



「小学校英語 It's FUN! ピクチャーカード」

特徴

- 1 英語学習のスタートはカードから!短時間でも使える!
- 2 文部科学省発表の指導計画案をもとに、各学年で重要な語を抜粋!
- 3 ③④のUnitは「Let's Try①,②」に、
⑤⑥のUnitは「We Can!①,②」に対応!
- 4 英語活動から英語科までをカバー!様々な授業形態に対応可能!

価格 ピクチャーカード 3(112枚) 9,000円(本体)+税
ピクチャーカード 4(108枚) 9,000円(本体)+税
ピクチャーカード 5(160枚) 9,800円(本体)+税
ピクチャーカード 6(164枚) 9,800円(本体)+税

仕様 3～6年生 各学年用 A4判 オモテ面カラー/ウラ面1色